

令和3年度 学校経営計画及び学校評価

1 めざす学校像

「一人ひとりの花を咲かせよう！ そしてともに輝こう！」をキャッチフレーズに、
児童生徒一人ひとりが日々輝き、卒業後にいきいきと社会生活を送ることができるよう、
以下の学校づくりを行う。

- 1 知的障がい教育の理論と実践の積み重ねに裏付けられた専門性の高い教育を行う学校
- 2 保護者や地域の人たちとともに児童生徒の一つひとつの成長を喜び合う学校
- 3 教職員がいきいきと働く学校
- 4 地域の小中学校等が自立して支援教育を推進することをサポートする学校

2 中期的目標

1 知的障がい教育の専門性構築＜学校教育自己診断の保護者評価「指導方針に共感」R3：90%、R4：91%、R5：92%＞
キャッチフレーズ：「寝屋川支援プライド ～誇りをもって～」

(1) 卒業後の自立に向けた生徒一人ひとりに応じた教育を実践する（自閉スペクトラム症の特性に応じた指導・支援を含む）

- ア 正確なアセスメントを行う
- イ 社会でも継続した支援を受けることができる教材・教具の工夫を行う
- ウ 児童生徒の達成感・自己肯定感を育成する
- エ 新しい職業カリキュラムの充実
- オ 卒業後の豊かな人生に向けた進路指導
- カ 個々に応じた自立活動を進める

(2) 時代にマッチした教育理論を構築する

- ア 「自立活動」を再考する
- イ 応用行動分析に基づく指導支援を行う
- ウ 新生活様式に応じた教育を検討・展開する
- エ 生徒自身がスキルや情報モラルを習得できるICTを活用した取組みを推進する
- オ 生涯にわたって学ぶ姿勢を支援する
- カ 自助の力を育てる防災教育に努める
- キ 食育を推進する

(3) 次世代教員を育成する

- ア 人権感覚を高める
- イ 他学部との取組みを知る機会を作る
- ウ 経験の少ない教員を育成する
- エ 将来の管理職候補を育成する

2 保護者・地域・関係機関との連携＜学校教育自己診断の保護者評価肯定的評価（全体平均） R3：86%、R4：87%、R5：88%＞

キャッチフレーズ：「分かり合い ともに子どもを 育てよう！」

(1) 保護者との連携を深める

- ア 年度の早期に信頼関係を構築する
- イ 保護者間で悩みや喜びを共有できる場を設定する
- ウ 保護者の意見を受け止める機会を増やす
- エ 保護者から学ぶ

(2) 地域との交流を推進する

- ア あいさつ運動を展開する
- イ 緑化清掃活動を行う
- ウ 近隣の学校等との交流及び共同学習を行う
- エ 自主単独通学生徒を増やす

(3) よりわかりやすくスピーディーな情報発信を行う

3 働き方改革＜学校教育自己診断の教職員評価に「業務の効率化・平準化」の項目を新設。R3：80%、R4：82%、R5：84%＞

キャッチフレーズ：「魅力ある授業づくりは教職員の健康から！」

(1) 同僚性の高い職場づくりを行う

- ア 適材適所の人事配置を行う
- イ 学びあう雰囲気を作り出す

(2) 業務の効率化・平準化を行う

- ア デジタル化を推進する
- イ 業務の精選を行う
- ウ 年休の取得を進める

(3) 業務推進体制を再構築する

- ア 首席を学校経営の要として配置する
- イ 学年主任の業務を軽減する
- ウ 教務主任・保健主事、給食主任の業務を軽減する
- エ 学校経営計画の推進部署を明確化する

4 地域支援＜相談実施後の「訪問相談・来校相談アンケート」における肯定的評価 90%以上維持＞

キャッチフレーズ：「地域の自立をサポート！」

(1) 北河内支援学校相談サポートセンター（KSC）による「研修サポート」を行う

- ア 「支援教育公開講座」を行う
- イ 研修講師の派遣を行う

(2) 北河内支援学校相談サポートセンター（KSC）による「相談サポート」を行う

- ア 悩みを共有し「KITADE」を活用しながら実践のサポートを行う
- イ オンライン相談を行う

(3) 学校全体で地域支援を行う

- ア 「登録相談員」による地域支援を行う

府立寝屋川支援学校（高等部）

【学校教育自己診断の結果と分析・学校運営協議会からの意見】

学校教育自己診断の結果と分析 [令和3年12月実施分]	学校運営協議会からの意見
<p>1 結果の概要 保護者対象のアンケートは、今年度は15項目で実施した。14項目に関しては昨年度と同様の内容で行った。回収率については昨年度の77%に比べると3ポイント増加した。回答結果については、肯定的意見が90%以上の項目が5項目あった（昨年度より2項目減）。新設「学校は、地域とのつながりや交流の機会を設定している」の項目以外で、5%以上の増減は見られなかった。なお、保護者全体の「肯定的評価」の全体平均は、83.65%である。</p> <p>教員対象のアンケートは、今年度、24項目で実施した。回収率は、全体としては99%と昨年度と同様である。回答結果については、大きく変化の見られた項目（+5ポイント以上）が1項目あった。なお、「行政対象」のアンケートは、「教職員対象」を「教員」と「行政」に分けた12項目で実施し、教職員全体として合算している（これまで行政の回答の多くは「E:わからない」を占めており、「行政対象」の12項目を作成。項目の内容は「教員対象」と同じ）。教員・行政のアンケート項目に、それぞれ「学年・学部・分掌において、業務の効率化や平準化を行っている」を今年度より設けている（質問番号 教員：15、行政：12）。教職員全体の「肯定的評価」の全体平均は、74.8%であった。</p> <p>2 結果と分析 ☆以下の文書中「〇%」については、注釈がなければ各項目の肯定的意見の割合（回答A%+B%）となる。また「±〇ポイント」は、昨年度と比較した数字になる（例：昨年度80%→今年度83%の場合、+3ポイント）。</p> <p>○学校に対する意識に関するもの 保護者は「1：子どもは、学校に行くことを楽しみにしている」の項目で、83%（-1ポイント）と、昨年度と比べると減少している。さらに、児童生徒や保護者の願いに応えられるよう取り組んでいく。</p> <p>○学習指導・教育活動に関するもの 保護者対象のアンケート項目「4：子どもは、授業がわかりやすく楽しいと言っている（感じている）」は、77%と-2ポイントとなった。また、同項目で「わからない」と回答している保護者が15%（昨年度より+2ポイント）おられることから、分かる・楽しい授業になるよう授業力や専門性の向上を引き続き図るとともに、お子様の授業の様子を知っていただき、学校と家庭と共有できる取り組みがさらに必要であると考えられる。</p> <p>○児童生徒指導に関するもの 「2：学校の児童生徒指導の方針に共感できる」について、保護者からは90%（-2ポイント）と一定の評価をいただいている。また、「3：教職員は、子どもの障がいについて、よく理解している」「教職員は、日常の教育活動において、子どもの人権を十分に尊重している」という項目では、91%（-1ポイント）、89%（-3ポイント）となっている。研修等を通して更なる障がい理解と、障がいを理解した上での教職員の実践・言動の見直しを徹底していき、継続できるように努めていく。</p> <p>○情報提供に関するもの 「5：学校は、教育情報について、提供の努力をしている」は、88%（-2ポイント）、「13：学校は、ホームページや緊急連絡システムを通して、情報をわかりやすく発信している」では、94%（±0ポイント）と高評価を得ている（教職員も94%、±0ポイント）。一方で、メールでの連絡が複数回に渡ることや、必要な内容がわかりにくいというご意見もいただいている。より良い情報発信や方法を心がけていく。</p> <p>○学校組織に関するもの 「16：経験の少ない教職員が成長していけるよう校内研修等、工夫がされている」が63%（2年間で+10ポイント）となっている。現在は特にICT機器を活用する機会が増えている。一方で、全教職員が教育実践に生かせる研修等の工夫は、さらに引き続き必要である。また、2年間で増加はしているものの、学校全体として教職経験の少ない教員をバックアップしていく体制の確立も引き続き必要である。教職員の「10：教員間で授業見学をし、授業方法等について検討する機会がある。」に関しては、56%（+6ポイント）であった。教員間で授業を観ることができるよう、授業の様子を動画で撮ったものを、全教職員が視聴できるようにしている。しかしながら教職員の実感としては、半数程度に留まっている。「授業方法等について検討する」機会として、経験年数の少ない教職員の授業力や専門性向上にも大きく関わってくるところであるため、今後も引き続き授業見学・授業方法等の検討の機会の有り方について検討していく。</p> <p>「13：教職員の適正・能力に応じた校内人事や校務分掌の分担がなされ、学校経営に教職員の意向が反映されている。」については、一昨年度と比べると8ポイント増加しているものの、昨年度と同様49%と低い肯定的評価となっている。この項目には、複数の要素が盛り込まれているため、評価が低い原因がどの部分にあるのかは、引き続き分析し、改善に取り組んでいく。</p> <p>○新設の項目について 保護者新設項目「15：学校は、地域とのつながりや交流の機会を設定している」では、63%であった。今年度も交流の機会などが中止になることが多かった。交流できる工夫をしつつ、推進したい。</p> <p>教職員の新設項目「24：学年・学部・分掌において、業務の効率化や平準化を行っている」については、58%であった。現在、業務の効率化や平準化を進めているが、各教職員の実感までは至っていない様子である。各教職員の意見等を吸い上げながら、より働きやすい職場づくりを進めていく。</p>	<p>【第1回 令和3年7月1日（木）】 ○地域支援については、地域の学校の支援学級の担当教員は助かっている。今後も継続してほしい。 ○防災の取組みについて、とても取組みが進んでいる。地域の学校でも参考にしたい。 ○学校が変わってきているように感じる。先生方からもその雰囲気を感じることができる。コロナ禍でも様々な面で頑張っておられる。しかし、先生と保護者の距離が近くなりすぎて、保護者からの要求が過度になりすぎないか心配。保護者と先生方との距離を保ち、協力していきたい。 ○地域との交流や就学前施設とも連携を深めようと打ち出している。センター的機能と連動していく部分が大いにあると感じる。就学前の施設として一緒に取り組めたらと思う。イメージの沸く学校経営計画になっている。 ○学校経営計画が変わり、フレーズなどおもしろい。先生方の意見が反映されているように感じる。寝屋川支援学校で教育実習を行った人の感想で、支援学校は寄り添うだけでなく、将来を見据えて後ろから見守ることの大切さを学んだと聞き本校でも参考にしていきたい。寝屋川サロン、先生方が家族のように過ごせる場所であり、とても大切だと感じる。先生方からも自分たちをよくしていこうという姿勢が感じられる。 ○教育を進めるにあたって「理論」を意識することが大切。教える側にも教わる側にも「なぜこれをするのか」ということを説明できる、わかっていることが大切である。 ○特別支援学校の中身を作っていくことが大切。強みを作っていくことが大切。自立活動にキャリア教育を組み込み取り組んでいるワークと、ワークだけでなく「ライフ」のキャリアを作り上げていくことが大切だと考える。すべてがつながっているの、そのつながりをこれから作っていくものかと。居住地校交流、センター的機能で何をベースに行っていくのか、何をとり上げるのか、地域の先生方と一緒に作り上げていくと、よりよくなっていくと感じる。</p> <p>【第2回 令和3年11月25日（木）】 <ICTを活用した授業の取組について> ○非常に興味深い。一方、授業研究の観点から見ると、ICTを取り入れることで、他のものを使った時との違いを考える必要がある。また、授業全体として考えることや、ポストコロナのことも考えていく必要がある。支援学校の児童生徒は実際に触れていくことが必要だが、コロナで機会が少なくなった。ICTはそれを補うことができる。また、コロナ禍で訪問型の居住地校交流は難しかったが、ICTを使うことで実施が可能。コロナ後も、様々な活用ができるのではと考えている。支援学校間同士の交流等、防災の部分でもICTを使えば、離れた所でも一緒に学ぶなどができる。検討をお願いしたい。 ○なかなか学校行事ができない状況の中、ICTを活用して行事や授業を進めておられる。その取組みを知ることができた。 ○積極的に活用しているのが素晴らしい。時代はどんどん変化していく。社会がどんどん変わっていているので、こういった取組みが必要。実際取り組んで効果が出ている。進めていくことで、きっと先の何かにつながっていく。説明の中に「デジタルが不得手を補う」とあったが、課題もあると思う。マイナスに働く場合もあるのでは。そのサポートの検証ができればと思う。 ○地域ではICT活用が進んでいる。地域で学んでいる子どもは、自宅に持ち帰って取り組んでいる。支援学校でも取り組んでいると初めてわかった。持ち帰るとなると、私たち保護者も勉強していかないと…と思う。 <キャリア教育プログラムおよびPECSの活用について> ○キャリア教育では、平成20年くらいから、ワークキャリアからライフキャリアに変わってきた。色々な学校でのキャリア教育を見てきており、重要な内容だと考えている。当初は、ワークキャリアと捉えている面があったが、本校のキャリア教育プログラムはライフキャリアの要素が強い。生活年齢と関連して進めていくことが大事。発達年齢で捉えがちだが、生活年齢で見えていくべき。また、教育活動全体を通して進めていき、小中高と積み上げていくもの。「つなぐ」がキーワード。仕事とつなぐ、地域とつなぐ、本人のニーズとつなぐなど。キャリア教育の観点の中に入れていく。PECSについては、例えば構造化、どうしても個別のプログラムになってしまう傾向がある。社会の対応していく力、子どもたちの関係性、個別ではなく集団として捉えていく必要があると思っている。 ○このキャリア教育プログラムはわかりやすい。視覚的に、保護者が見てもわかってもらいやすい。PECSは、いつから取り組んでいるか。個別構造化とどう違うのか、また成果を聞かせてほしい。 <令和3年度学校経営計画の進捗状況について> ○学校長から本質的で貴重な学校経営についての話が聞けた。一人ひとりの教員の気持ちを吸い上げるのはむずかしい。でもこの取組みでは、できている。寝屋川支援の先生には力があり、それを全体につなげている。キャリア教育を中心につなげていく取組みを見せてもらった。 ○学校経営を見て、本当に素晴らしいと思う。大変驚いた。キャッチフレーズを前回聞かせてもらっていたが、ヒアリングの様子をビデオで撮影して、その様子を開示している。準備も含めて、難しいことなので驚く。先生方の取り組みは、動画の画像からも、進路、キャリア教育、最終、子どもたちが大人になってどうしていくかを真剣に考えておられ、先生方の愛情を感じる。 ○学校経営計画を改めて聞かせてもらい、小中高と大きな学校なのに考えられた取組み。「就学前との取組み」を取り上げてもらっている。PECSだけでなく、療育として実践交流ができれば。進路の説明の中に、関係機関と連携して進められるものもあった。中学部では、中学部の進路が多様化している。取組みも多様化しているのか、また聞かせて欲しい。 ○学校経営の内容について、すごいなと思った。評価では、実際に行った数などのアウトプットだけでなく、自分たちがやってみてどう変化があったかのアウトカムも考えている。先生方が児童生徒に教えていく時、先生に気持ちがないと進まない。児童生徒にも良い影響を与える。</p> <p>【第3回 令和4年2月17日（木）】 <学校教育自己診断について> ○コロナ禍で行事が実施できないこともあると思うが、高評価を維持しているところは素晴らしいと感じている。 ○評価が下がっていると言われていたが、様々な工夫や、子どもの障がい理解の評価は高い。学校へ保護者が関わる機会はコロナ禍で減少しているが、その中でも十分取り組まれていると思う。 ○ICTやオンライン等は、新型コロナが終息したとしても、今までと同じに戻ってはいけな。今後は、ポストコロナ（コロナ禍後）に向けての観点も入れていただきたい。 <令和3年度学校経営計画評価（案）及び令和4年度学校経営計画（案）について> ○計画の評価は、数値化できないものは言語化することが大切。取組みが、伝わりやすいような評価基準があったり、他者が評価できるシステムなどがあつたりすればと思う。 ○教育は、数値的には評価しにくいところもある。積み重ねつつ取り組んでいってもらいたい。4年度計画も、ユーモアのあるものになっている。管理職目線だけではなく、教員、保護者、子どもの目線が盛り込まれていると感じる。また、教員同士の学びの場としての「サロン」は大切なことだと思う。 ○4年度計画では「ほめる、ほめる、ほめる！」から「わかる、できる、ほめる！」にキャッチフレーズが進化している。主体的な学習を踏まえると「わかる、自らできる、ほめる」などにさらに進化させてもらえたらと思う。また、教育実践の充実と、先生方の負担を考えると、ICTがポイントになってくると感じる。地域支援にオンラインが盛り込まれている。メリットになっているのではないかと。オンラインを最大限活用して、負担の軽減を考えていくと良い。 ○保護者の代表として参加することで、このような計画があり、協議をされていることを知った。自分の子どもと担任の先生のことは話題になるが、学校の教育全体や、先生方が取り組みを頑張っておられることに</p>

府立寝屋川支援学校（高等部）

についてはなかなか伝わりにくい。もっと保護者に伝わればよいと思う。
 ○令和3年度学校経営計画評価（案）及び令和4年度学校経営計画（案）について、運営協議会として承認する。

3 本年度の取組内容及び自己評価

中期的目標	今年度の重点目標 ＜推進部署＞	具体的な取組計画・内容 （「 」内の太字下線部分はキャッチフレーズ）	評価指標[R2年度値]	自己評価
知的障がい教育の専門性構築	(1) 卒業後の自立に向けた生徒一人ひとりに応じた教育を実践する（自閉スペクトラム症の特性に応じた指導・支援を含む）	(1)	(1) 学校教育自己診断の保護者評価 「障がい理解」90%以上[88%] 「授業は楽しい」80%以上[76%]	中期的目標全体 「指導方針に共感」87%（△） 「障がい理解」87%（△） 「授業は楽しい」71%（△）
	ア 正確なアセスメントを行う ＜支援部＞	ア <u>「明日を拓くキャリア教育プログラム！」</u> ・全校で「キャリア教育プログラム」によるアセスメントを行い、グループ編成等に積極的に活用する。	ア ・全校における「キャリア教育プログラム」によるアセスメントを完全実施	ア ・全校において1学期中にアセスメントを実施済み。次年度グループ編成に向けて追記し、自立活動目標の検討にも活用した。（○）
	イ 社会でも継続した支援が受けられる教材・教具の工夫を行う ＜支援部・担当首席＞	イ <u>「コミュニケーションを広げよう！」</u> ・PECS（絵カード交換式コミュニケーションシステム）を導入する。	イ ・PECSに関する研修を2回以上実施	イ ・6月に外部講師による全校研修実施。11月に小学部で事例報告を行うとともに、全校教員へ事例のビデオを公開した。（○）
	ウ 児童生徒の達成感・自己肯定感を育成する＜全校＞	ウ <u>「ほめて・ほめて・ほめる！」</u> ・「ほめる」場面を作る授業づくりを行う。	ウ ・各授業において、各児童生徒のほめの場面5回以上（准校長の授業観察時）	ウ ・ほめの場が5回以上確認できた。児童生徒の達成感や自己肯定感が高まった。（○）
	エ 新しい職業カリキュラムの充実 ＜高等部・進路指導部＞	エ <u>「HOP STEP JOB!～ここから、始まる～」</u> ・発達段階別のグループ編成により、生徒の実態に応じたきめ細やかな指導を行う。	エ ・学校教育自己診断の保護者評価 「将来の進路や職業」90%以上[88%]	エ ・授業観察時に生徒の実態に応じた細やかな指導方法を確認できた。肯定的評価88%（△）
	オ 卒業後の豊かな人生に向けた進路指導 ＜高等部・進路指導部＞	オ <u>「今を充実！未来を豊かに！」</u> ・1年次よりの校内実習を実施すると共に、職場見学・体験の回数を増加	オ ・校外の事業所・企業・関係機関への見学や体験を新規で3か所以上実施	オ ・全学年で校内実習完了。職場体験で新規の実習先を開拓し、3か所以上実施できた。（○）
	カ 個々に応じた自立活動を進める ＜高等部＞	カ <u>「パワチャレタイム（パワーアップチャレンジタイム）」</u> ・朝の時間を活用し、生徒個々に応じた自立活動を行う。	カ ・学校教育自己診断の教職員評価 「実態を踏まえた指導」90%維持[91%]	カ ・朝の巡回時に確認し、生徒の実態に応じたグループ編成での取組みを観察できた。肯定的評価85%（△）
	(2) 時代にマッチした教育理論を構築する	(2)	(2) 学校教育自己診断の保護者評価 「指導方針に共感」90%以上[87%]	「指導方針に共感」87%（△）
	ア 「自立活動」を再考する ＜支援部＞	ア <u>「支援教育の基礎は自立活動！」</u> ・「自立活動」を基礎から学びなおすとともに「全体の指導」を意識した授業を行う。	ア ・「自立活動」に関する全校研修1回	ア ・支援部内で1回実施。その他、LSによる講座を開催。全校で「全体の指導」を意識できた。（○）
	イ 応用行動分析に基づく指導支援を行う ＜支援部＞	イ <u>「言動の前後にも注目！」</u> ・指導・支援に応用行動分析の視点を取り入れる。	イ ・応用行動分析に関する全校研修1回	イ ・8月に外部講師による全校研修を実施。「実践していきたい」という感想があった。（○）
	ウ 新生活様式に応じた教育を検討・展開する ＜全校・健康教育部＞	ウ <u>「マスクの下の笑顔をチェック！」</u> ・日々の授業において、新型コロナウイルス感染症の感染予防につとめる。 <u>「限られた中で最大限の力を！」</u> ・これまでの行事等を見直す。	ウ ・手洗い・マスク着用の推進（手洗い・マスク着用動画の作成） ・「運動会」「学習発表会」「学習展示会」の実施方法の再検討	ウ ・昨年度作成した動画を整理し活用した。また、新たに動画を作成し、生徒の指導に活用した。（○） ・次年度について決定したが、今後については検討中。（○）
	エ 生徒自身がスキルや情報モラルを習得できるICTを活用した取組みを推進する ＜全校・情報教育部＞	エ <u>「GIGAスクールでつくる(it's cool!)スクール(so cool!)」</u> ・GIGAスクール構想で導入される機器を活用した授業を展開する。 <u>「ICTでできること？」</u> ・ICTの活用を推進するとともに、情報モラルの意識向上に取り組む。 <u>「デジタルを追い越せ！アナログも大切に！」</u> ・デジタル教材とアナログ教材の両方をバランスよく活用した授業を行う。	エ ・タブレットを活用した座学の授業20%以上 ・情報モラル学習年2回以上実施 ・アナログ教材の工夫80%以上の授業で実施	エ ・全校で「1人1台端末活用PT」を立ち上げ検討した。活用率50%前後（◎） ・12月に保護者向け・生徒向け（一部生徒）に外部講師を招聘し講演を実施し、授業で振り返りを行った。（○） ・ほぼすべての授業で実施できた。（○）
	オ 生涯にわたって学び姿勢を支援する ＜視聴覚教育部＞	オ <u>「life ラリー ライブラリー！」</u> ・卒業後の余暇活動につながる読書教育を推進する。	オ 図書室開放デーの実施（月1回）	オ ・月1回実施した。図書室の環境整備にも取り組んだ。（○）
	カ 自助の力を育てる防災教育に努める ＜児童生徒指導部・首席＞	カ <u>「安全は一人ひとりの気づきから！」</u> ・BCP（事業継続計画）を活用した防災研修・防災訓練を行う。	カ ・「机上防災訓練」「災害発生時の初期対応シミュレーション」各1回実施 ・これまでとは違った形での避難訓練実施2回	カ ・「机上訓練」「初期対応」とともに実施し課題を整理できた。（○） ・これまでと違った時間帯で実施。封鎖箇所も設定した。（○）
	キ 食育を推進する ＜健康教育部＞	キ <u>「おいしい給食を子どもたちへ！」</u> ・安心安全の給食を提供する。	キ ・アレルギー事故を防止するために、朝の連絡会及び喫食前の確認の徹底 ・野菜の洗浄2回実施	キ ・確認を徹底した。事故は0件だった。（○） ・2回以上実施した。（○）
	(3) 次世代教職員を育成する	(3)	(3) 学校教育自己診断の教職員評価 「初任者、経験の少ない教職員の成長」60%以上[51%]	「初任者、経験の少ない教職員の育成」48%（△）
	ア 人権感覚を高める ＜高等部＞	ア <u>「磨こう人権感覚！ほかほかと温かい心！」</u> ・体罰、不適切な指導等の防止に努める。 <u>「さんさん(くん)呼称運動で笑顔燦々！」</u> ・授業においてはさん・くん呼称を付けオフィシャルなものとすると共に、生徒の人権を尊重する。	ア ・体罰・不適切な指導を起ささないための人権研修を年1回実施 ・学校教育自己診断の教職員評価 「人権尊重の姿勢」90%以上[82%] 学校教育自己診断の保護者評価 「人権尊重の姿勢」90%維持[92%]	ア ・密を避けクラス単位で実施した。結果を全校で共有した。（○） ・授業観察時に呼称について確認できた 教職員評価85%（△） 保護者評価87%（△）
	イ 他学部の取り組みを知る機会を作る ＜部主事＞	イ <u>「他学部を知ろう！」</u> ・初任者が所属学部以外の部の業務を体験する機会を設ける。	イ ・十分な準備のもと、他学部の初任者が初任者同士で丸一日担任を入れ替わり、児童生徒の指導支援を行う。年1回	イ ・11月に実施した。「今後の指導・支援に生かしたい」との感想が聞かれた。（○）
ウ 経験の少ない教員を育成する	ウ <u>「応用行動分析って何？」</u> ・応用行動分析に基づく指導法を学び、実践	ウ ・全校研修に加え、グループワークを実施する。年2回	ウ ・全校研修時に事例検討のグループワークを実施した。臨床心理	

府立寝屋川支援学校（高等部）

	<p><支援部> 工 将来の管理職候補を育成する <准校長></p>	<p>する。 工 <u>「学校経営って楽しい！」</u> ・学校経営の魅力を伝える機会を設定する。</p>	<p>工 ・「スクールリーダー養成講座」を開講する。年1回</p>	<p>士による事例相談も行った。(○) 工 ・8月に実施。管理職4人が「やりがい」について講話した。6人の参加があった。(○)</p>
<p>保護者・地域・関係機関との連携</p>	<p>(1) 保護者との連携を深める ア 年度の早期に信頼関係を構築する <全校> イ 保護者間で悩みや喜びを共有できる場を設定する。 <部主事> ウ 保護者の意見を受け止める機会を増やす。 エ 保護者から学ぶ <全校> (2) 地域との交流を推進する ア あいさつ運動を展開する <児童生徒指導部> イ 緑化清掃活動を行う <高等部> ウ 近隣の学校等との交流及び共同学習を行う <高等部> エ 自主単独通学生徒を増やす <高等部> (3) よりわかりやすくスピーディーな情報発信を行う <情報教育部></p>	<p>(1) ア <u>「グッドスタート！」</u> ・年度当初は、連絡帳・電話・家庭訪問・懇談会等を通じた日々の情報交換を特に丁寧に行う。 イ <u>「なんでも話そうかい(会)！」</u> ・保護者が家庭における子育ての悩みや喜びを気軽に共有できる場を設定する。 ウ <u>「喜びも悩みも共有します！」</u> ・保護者の喜びやしんどさをより広く受けとめていく。 エ <u>「保護者に教えてもらおう！」</u> ・「児童生徒を最も理解しているのは保護者である」との再認識のもと、保護者に教えていただきながら本人の指導・支援を行う。 (2) ア <u>「おはよう!!元気ですか? ~地域との連携~」</u> ・朝の散歩等の校外での学習に際して、積極的に挨拶を交わすことで、お互いの理解を深める。 イ <u>「いつもお世話になってます！」</u> ・近隣施設での清掃活動、園芸活動をとおし、お互いの理解を深める。 ウ <u>「密を避けて、親密になろう！」</u> ・新型コロナウイルス感染症を踏まえた、交流及び共同学習を行う。 エ <u>「自主単で育もう!生きる力！」</u> ・保護者と連携し自主単独通学を通して、社会自立に向けた生活力・応用力を育てる。 <u>「笑顔こんなに はじけてる！」</u> ・本人・保護者了解のもとで、ほかしなしの児童生徒の活動風景・作品等の情報発信を行う。(年度初めにアンケート実施)</p>	<p>(1) 学校教育自己診断の保護者評価 肯定的評価→全体の平均 86%以上 [85%] ア ・学校教育自己診断の保護者自由記述欄に「年度当初に担任との連携がとりにくかった」等の記述0件 イ 「なんでも話そう会」の実施。年1回 ウ 校長Dメールに加え「ご意見箱」の設置 エ ・懇談会・家庭訪問の実施 懇談会・家庭訪問時により丁寧に聞き取りを行う。 学校教育自己診断の保護者評価 「子どもの障がい理解」90%維持 [92%] (2) 学校教育自己診断の保護者評価に「地域との交流」の項目を新設する。 肯定的評価 80%以上 ア ・挨拶推進月間の実施各学期1回 イ ・近隣施設での清掃活動、園芸活動の継続した実施、R2以上 [清掃活動12回、園芸活動3回] ウ ・近隣の学校、病院との交流及び共同学習の実施、R2以上 [交流及び共同学習4回] エ ・自主単独通学生徒の今年度比 80%増加 (3) 学校教育自己診断の保護者評価 「わかりやすい情報発信」90%維持 [91%] ・ほかしなしの情報発信を試行</p>	<p>中期的目標全体 全体の平均 84% (△) ア ・年度初めには保護者からの特段の苦情等はなかった。その後も日々連携に努めた。(○) イ ・12月にPTA主催で「子育て交流会」を実施した。19人の参加があった。(○) ウ ・5月に玄関に設置した。保護者向け校長室だよりで周知を行った。(○) エ ・新型コロナウイルス対策の上、懇談会・家庭訪問を実施した。希望者には、オンラインを活用した懇談も行った。 「子どもの障がい理解」87% (△) 「地域との交流」75% (△) ア ・校外では、教員の促しにより挨拶が広がった。しかし、新型コロナウイルスの影響もあり「元気な挨拶」は難しかった。校内では、登校時にブラカードや横断幕を使って挨拶運動を実施した。(○) イ ・寝屋川公園の花の植え替えを1回実施。近隣病院の清掃活動を2回行った。(△) ウ ・病院との交流は今年度も中止。高等学校との交流は内容を工夫して2回実施。(△) エ 保護者と連携を図り、安全に十分留意し、125%増加した(◎) 「わかりやすい情報発信」96%(○) ・ブログにほかしなしの活動風景を掲載した。いきいきとした様子が伝わる発信ができた。(○)</p>
<p>働き方改革</p>	<p>(1) 同僚性の高い職場づくりを行う ア 適材適所の人事配置を行う イ 学びあう雰囲気を作り出す (2) 業務の効率化・平準化を行う ア デジタル化を推進する <教務部> イ 業務の精選を行う <教務部> ウ 年休の取得を進める <全校> (3) 業務推進体制を再構築する <全校> ア 首席を学校経営の要として配置する イ 学年主任の業務を軽減する ウ 教務主任・保健主事、給食主任の業務を軽減する</p>	<p>(1) ア <u>「得意分野での力の発揮で、互いにリスペクト！」</u> ・これまでの実績を参考にしつつも「やってみよう」という気持ちを大切に人事配置を行う。 イ <u>「寝屋川サロン open! ~学ぶって楽しい~」</u> ・教員同士の学びあいの場を作る (2) ア <u>「今までの 常識変えるよ デジタル化！」</u> ・月中行事予定・特別教室使用管理・学校見学会申し込み等のデジタル化を進める。 イ <u>「減らせるものは減らす年(ねん)！」</u> ・今年度は、会議や文書チェック等、減らせるものは徹底的に減らす一年とする。 ウ <u>「仕事も大事!自分や家族も大事！」</u> ・計画的に年休を取得できる体制を整える。 (3) ア <u>「鍋蓋型からピラミッド型へ！」</u> ・各首席が2つずつの校務分掌を統括する体制を整える。 イ <u>「主任さん、それやりますよ！」</u> ・業務軽減のため、学年主任を校務分掌業務から外す。 ウ <u>「3・4人寄せれば文殊の知恵！」</u> ・教務主任・保健主事、給食主任にサブを付ける。</p>	<p>(1) ア 学校教育自己診断の教職員評価 「適正配置」60%以上[38%] イ ・「授業データベース」の活用を推進する 学校教育自己診断の教職員評価 「授業方法等の検討」60%以上 [38%] (2) 学校教育自己診断の教職員評価に「業務の効率化・平準化」の項目を新設する。 肯定的評価 80%以上 ア ・「グループウェア」を活用した業務の縮減と入力ミスの防止 イ ・ノー会議デーの完全実施(月1回) ウ ・年休取得日数一人平均1割増 (R2年度は臨時休業期間があったため R1年度と比較する) [R1年度4月~1月:13.3日] (3) 学校教育自己診断の教職員評価 「業務分担と学校経営への参画」 60%以上[38%] ア ・各首席が2つの校務分掌を統括 イ ・学年主任を校務分掌業務から外す 学校教育自己診断の教職員評価 「適正配置」60%以上[38%] ウ ・教務主任・保健主事、給食主任にサブをつける。 学校教育自己診断の教職員評価 「適正配置」60%以上[38%]</p>	<p>中期的目標全体 「業務の効率化・平準化」51% (△) ア 学校教育自己診断の教職員評価 「適正配置」45% (△) イ 授業見学时に原則すべての授業を録画し公開した。活用状況を調査中。 「授業方法等の検討」51% (△) 「業務の効率化・平準化」51% (△) ア ・学校見学会申し込み等のデジタル化を進めた。各種会議資料もデジタル化した。(○) イ ・実施できた。(○) ウ 出勤簿関係のシステム変更により算出できなくなったため評価なしとする。(ー) 「業務分担と学校経営への参画」49% (△) ア ・統括し、相談に乗ることで分掌長から「助かっている」との評価があった。(○) イ ・校務分掌から外した。 「適正配置」49% (△) ウ ・サブを配置し、推進体制を整えた。 「適正配置」49% (△)</p>

府立寝屋川支援学校（高等部）

	エ 学校経営計画の推進部署を明確化する	エ <u>「自主自律の学校経営を！」</u> ・学校経営計画にそれぞれの項目の「推進部署」を明記し、PDCA サイクルに基づき計画を推進する。	エ ・推進部署の明記	エ ・明記した。年度当初に計画の確認、年度途中に進捗状況の確認を行うなど、PDCA サイクルで推進した。(◎)
地域支援	<p>(1) 北河内支援学校相談サポートセンター（KSC）による「研修サポート」を行う ＜支援部、L.S.＞ ア 「支援教育公開講座」を行う</p> <p>イ 研修講師の派遣を行う</p> <p>(2) 北河内支援学校相談サポートセンター（KSC）による「相談サポート」を行う ＜支援部、L.S.＞ ア 悩みを共有し「KITADE」を活用しながら実践のサポートを行う イ オンライン相談を行う</p> <p>(3) 学校全体で地域支援を行う ＜L.S.、全校＞ ア 「登録相談員」による地域支援を行う</p>	<p>(1) <u>「学びの場を提供します！」</u> ア 夏季休業中に地域のニーズに合わせた「支援教育公開講座」を開催する。 イ 市教育委員会・学校園からの要請を受け、研修講師の派遣を行う。</p> <p>(2) <u>「子どもたちへの支援、一緒に考えます！」</u> ア 学校園の先生方が子どもたちへの支援を行う際の悩みを一緒に考え、また北河内教材データベース「KITADE」を活用しながら、実践のサポートを行う イ 訪問相談に加えて、ケース内容に応じてオンラインでの相談も行う（継続相談等）</p> <p>(3) <u>「みんなのパワーを結集した地域支援！」</u> ア 「登録相談員」制度を開設し、校内の教員の得意分野等に基づいて、情報提供や実際の相談等を行う</p>	<p>(1) ア 5講座を開講する。感染症の状況によっては、WEB による形で開催し、実施後のアンケートで研修内容の肯定的評価 95%以上[すべて中止] イ すべての要請に対応する [支援回数 54 回（訪問・来室・電話相談、研修講師）] (2) 相談実施後の「訪問相談・来校相談アンケート」における肯定的評価 90%維持 [90%] ア 高等学校への相談支援 2回以上維持 [2回] イ オンライン相談の実施 (3) ア 「登録相談員」制度の開設</p>	<p>中期的目標全体 肯定的評価 90% (○)</p> <p>ア WEB 開講し、224 人の参加があった。アンケートの肯定的評価 95% (56 人から回答あり)。(○) イ すべての要請に対応した。56 回の支援を行った。(○) 肯定的評価 90% (○)</p> <p>ア 2回の訪問相談を実施した。研修も 1 回行った (○)。 イ 多くの研修をオンラインで実施した。打ち合わせもオンラインを積極的に活用した。(○)</p> <p>ア 登録員制度を開設し、登録を進めた。次年度より運用を開始する。(○)</p>